【研究ノート】

ハンブルク市の拡大の歴史と IBA ハンブルク

北 澤　恒 人

要　旨

本稿では、まずドイツのハンブルク市を対象として、その住民数の増加と市域の拡大を歴史的に跡づけ、これをヨーロッパの都市の一類型として考察する。次に、現在抱えている都市問題を解決するためにハンブルク市が採用した展覧会という手法を紹介する。すなわち 2013 年度に全プロジェクトが終結するハンブルク国際建築展覧会（IBA Hamburg）と、同時に開催される国際園芸博覧会（IGS 2013）の二つであるが、これには自然破壊だとの批判も出されている。

キーワード

城塞環濠都市，　自由ハンザ都市，　大ハンブルク法，
国際建築展覧会（IBA），　国際園芸博覧会（IGS）

ABSTRACT

This paper traces the history of the expansion of Hamburg region and the increase in the number of its residents, and regards this as a typical history of cities in Europe. Then the technique of the exhibition Hamburg adopted in order to solve the urban problems of the metropolis is introduced, that is, the international building exhibition Hamburg (IBA = Internationale Bauausstellung Hamburg), all the projects of which will end in 2013, and the International Garden Show (IGS 2013) held simultaneously, whereas the latter is also criticized.

KEYWORDS

Fortified Cities with Walls and Moats, Free and Hanseatic City, Greater Hamburg Act, the international building exhibition (Internationale Bauausstellung), the international garden show

1. はじめに

大東文化大学環境創造学部設置科目「内外研修 A」で 2012 年度の訪問先として選んだのは、ドイツのハンブルク市州である。選択の理由の一つには、ハンブルクが欧州連合（EU）委員会によって「2011 年度 EU 環境首都」に選ばれたことがある。ここを拠点にハンブルクのまちづくりの取り組みを学ぶとともに、バルト海沿岸の小都市エッカーンフェルデ（1994 年にドイツの NGO「ドイツ環境支援」が主催するコンテストで環境首都に選定された）と、エネルギー自立への取り組みで現在注目されているデンマーク・ロラン島を視察した。いずれからも学ぶことの多かったが、その中から本稿では、ハンブルクの都市としての歴史的発展と 2013 年に終結公開年度を迎えるハンブルク国際建築展覧会（IBA)を取り上げる。ハンブルク視察を機に調べ考えたドイツの都市の特徴やそのまちづくりの手法などを、ハンブルクの歴史とともに地域研究の一環として整理しておきたいと考えたからである。

ハンブルクはドイツ北西部、北海のエルベ川河口から 100km ほど内陸に位置する港湾都市で、正式には「自由ハンザ都市ハンブルク」（Freie und Hansestadt Hamburg）という。ドイツには人口 100 万を超える大都市は 4 つしかない。その中でハンブルクは人口数の面で、ベルリン（3,501,872 人）に次ぐ第二位を占める（1,798,836 人）。残りはミュンヒェン（1,378,176 人）とケルン（1,017,155 人）である（2011 年 12 月 31 日現在）[1]。ハンブルクはベルリンとともに、一市単独で連邦州（ラント Land）を構成する特別市で、都市州として強力な権限をもっている。ほかに人口ではドイツ 10 位のブレーメン（548,319 人）が「自由ハンザ都市ブレーメン」(Freie Hansestadt Bremen)として（ブレーマーハーフェン市とともに）都市州を形成している。

本稿では、まずハンブルクの歴史的発展を取り上げる。それは IBA ハンブルクの取り組みを深く知るためには、その歴史的背景を知っておく必要があると考えるからである。ただその歴史を網羅するというのではなく、焦点をその市域の拡大にあわせ、現在の市州域の成立までをヨーロッパ史における都市発展の一類型として扱う。その上で、ハンブルクがまちづくりの手法として採用した国際建築展覧会および国際園芸博覧会について紹介したい。

ハンブルクの都市としての歴史は 9 世紀までさかのぼるが、始まりはキリスト教布教の拠点として前線基地の役割を果たす砦であったにすぎない。このことは中欧の多くの都市にも共通の事情であろう。キリスト教教会を中心に市（いち）が立ち、集落ができ、異民族・異教徒の襲撃に備えて周囲に防護柵が設けられ、それがやがて城壁に代えられていく。そこでハンブルクの居住者数の増加と市域の拡大は、中欧都市の成長の一類型として眺めることができる。時代が下ると、封建諸侯の圧力にも対抗できるように城壁はより強固なものとなり、防御のための水壕や敵を撃退するための堡塁が設けられるようになった。

このような形成・発展の経緯から、ヨーロッパの都市と日本の都市との違いが生じたのであろう。日本では、領主の居館が城砦でありその周りに二重、三重の城壁や水壕が築かれた。戦乱の

際には城に立て籠もり城から出撃するにしても、平時には武士や町民・商人は城壁の外に、区域ごとに分かれ住んでいる。つまり市内と市外との区別は明確ではない。これに対して欧州では、領主の居館を中心とした都市の場合にも、市域が明確に城壁で囲まれその内側に住民が生活する。諸侯から独立した自由都市の場合には、市民が自らその独立と自由を守らなければならないから、市外との出入りは頑丈につくられた市門で管理された。日没後は閉門され、出入りできなくなる。市の中心部には、市民の中の有力者たちが集まる市庁舎(Rathaus)が築かれた。

しかし城壁は、都市人口の増大に対し限界を設けるものでもある。人口の増大が圧力となり、人の交流、商品流通の急速な拡大によって城壁や市門が撤去され、市域は一挙に拡大することになる。こうした経緯はハンブルク市の歴史的拡大においても、典型的に現れている(2)。

2. ハンブルク市の歴史とその拡大の歩み

2.1 ローマ教会キリスト教布教の拠点としての城砦

現在のハンブルク周辺地域における人の居住は紀元前 4 世紀までさかのぼることができるが、4 世紀から 6 世紀頃の民族大移動の時代に、この地域に多く移住したのはザクセン人だった。

ハンブルクの基礎が築かれたのは、9 世紀初頭のことである。エルベ川にそそぐ支流アルスター川（die Alster, 全長 56km）のほとりにはこの時すでに入植地が築かれていた。「ハム」とは古ザクセン語で「岸辺」、低地ドイツ語では「入り江」を意味する。フランク王国のカール大帝（Karl der Große, 742-814, フランク国王在位 768-814, 西ローマ皇帝在位 800-814）は、ザクセン人を征服した後に、この地をザクセンはじめ、デンマーク、スウェーデンなどの北方諸族へのローマ教会キリスト教伝道の拠点としようとした。皇帝の布告により 811 年頃、アルスター川とビレ川(die Bille, 全長 65km)の間に最初の洗礼教会が創建された。そして、次のルートヴィヒ敬虔王（778-840, フランク国王在位 814-840, 西ローマ皇帝在位 814-840）の時代に教会と住民の安全を図るために、防御柵に囲まれた避難用砦が築かれて「ハンマブルク(Hammaburg)」と名づけられた（832 年が初出）。広さは 130 メートル四方で 40 ないし 50 人ほどが避難できるもので、柵の高さは 5, 6 メートル、幅は 15 メートルだったという。ただ名称の由来については異説もある。これによると、この場所がもともと沼沢地に囲まれた砂丘斜面（古いドイツ語で「ハンメ」という）、その自然条件によってうまく守られていたために、本当の砦はなかったものの、初期の移住者たちによって天然の砦という意味でハンマブルクと呼ばれたという。

いずれにせよこのハンマブルクには 831 年、司教区が設置され、翌年に大司教区とされた。最初の司教に任ぜられたブレーメンのアンスガル（Ansgar, 801-865）は、この地に布教のための聖母教会を創建させ、ここを拠点にデンマークとスウェーデンへ宣教の旅に出た。だがこの居留地は 845 年、ヴァイキング（デーン人・ノルマン人）による略奪を受けて灰燼に帰した。教会も炎上したため、アンスガルは避難せざるをえなかった。848 年の教会会議（Synode）によって、ブ

レーメン司教区がハンブルク大司教の管理下に置かれることが決定され、ハンブルク・ブレーメン大司教区が生まれた。ブレーメンに司教を送り出していたケルン大司教が強く抵抗したものの、ローマ教皇は 864 年に大司教区設置の勅書を発した。

915 年にはスラヴ人の襲撃を受けて、居留地も再び破壊された。その後で大司教座が再建され、新しい砦が築かれるが、さらに手工業者や小商人の住む居住地が設けられ、定期市の開催も許可された。ザクセン公オットー1 世(Otto I., der Große, 912-973, 王位 936-973, 皇帝位 962-973)は皇帝位に就くと、皇帝代理のヘルマン・ビルング（Hermann Billung, 900/912 – 973）にザクセン領の管理を委ねた。

ハンブルク居住地の再建は 11 世紀初頭まで続き、12 の防御塔を備えた環状の市壁によって囲まれる旧市街（アルトシュタット）が形成された。ハンブルクはスカンディナヴィア諸国への布教の出発点となり、また北方および東方方面との交易も開始された。しかし 1066 年と 1072 年に、またもやスラヴ人の襲撃を受けて、以後大司教座はブレーメンへ移された。

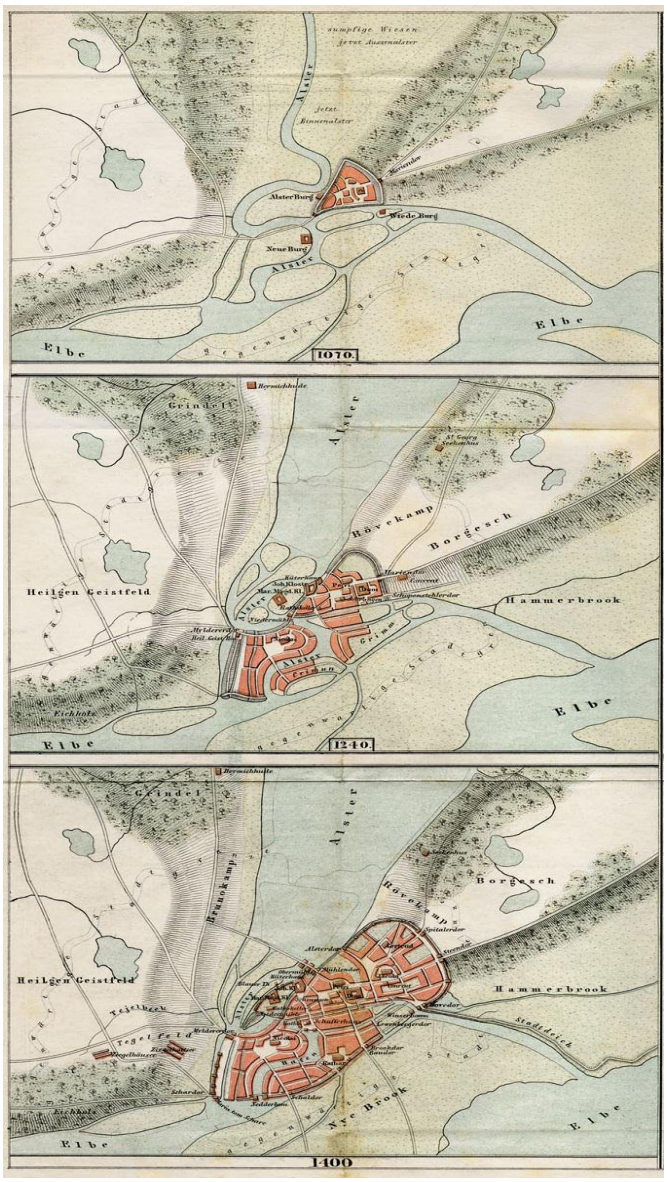

図 1　ハンブルクの拡大のようす

（E. H. Wichmann, Heimatskunde. 1863.）

上から 1070 年、1240 年、1400 年の居住地の図。1070 年の図では、聖ペトリ教会と大聖堂を中心に居住地が柵で囲まれており、中に入る門は 2 つだけである。その周りに 3 つの砦が配置されている。1240 年の図ではアルスター川西岸の砦のあった場所に、聖ニコライ教会を中心とした新市街が形成されている。またアルスター川が堰き止められて湖となっており、その畔に製粉所が設けられている。1400 年になると市域が東方へ拡大し、全体が城壁と水壕に囲まれている。市門も 9 つに増えている。

2.2 市街地の形成、貿易都市への発展

12 世紀にビルング家が途絶すると、シャウエンブルク家のアードルフ 1 世（? －1130）がシュトルマルンおよびホルステンガウ（ホルシュタイン）伯に任命され、ハンブルクのザクセン公領をも治めることになった。彼は、エルベ川の湿地と中州を堤防で囲み、干拓させた。また 1124 年に製粉用水車を動かすために、アルスター川が初めて堰き止められた。さらにアードルフ 3 世(1160－1225)治世の時代には、無人の草地が水没させられてアルスター湖が生まれた。北方最大の水力製粉所を稼働するための水車用貯水池として利用するためである。

この時期は、北ヨーロッパ地域での貿易が急速に発展した時代でもあって、その中でエルベ川は舟運上の動脈として重要性を増していった。人口の急増により、大司教の支配する旧市街の外に、アルスター川西岸のザクセン公領にも居住地は拡大していく。1188 年、アードルフ 3 世はアルスター川の西岸、砦が設置されていた中州に港を建設させ、その周辺に商人たちの居住を促した。1189 年 5 月 7 日、神聖ローマ帝国皇帝バルバロッサ（Friedrich I., Barbarossa, 1112-1190）からハンブルクに対してエルベ川の徴税特権が付与され、ハンブルク港が正式に開港した。この特権状によってハンブルク商人は税金を払わずに、北海まで自由に航行できるようになった。またハンブルク市民は、市の防衛の義務を負うだけで、兵役を免除された。ホルシュタイン伯の治める商人たちの居住地区には聖ニコライ教会が建てられ、地区は新市街（ノイシュタット）として発展してゆく。この港が、後年のハンブルク繁栄の基礎となった。

1201 年、スレースヴィ（シュレースヴィヒ）公ヴァルデマール 2 世（Waldemar II., 1170 – 1241, スレースヴィ公 1182–1202, デンマーク王 1202–1241）がハンブルクを襲撃し、市と地域を占領し、アードルフ 3 世を捕虜にした。デンマーク軍に占領されたハンブルクは、デンマークの総督によって統治されたが、それによって旧市街と新市街との一体化が進行した。ハンブルクは市庁舎、参事会、法廷を統一した。一体化したハンブルクが自由を回復するのは、1227 年に北ドイツ諸侯連合とリューベックがボルンヘーフェトの戦いでデンマークを破ってからである。以後ハンブルクはシャウエンブルク家の統治下に入るが、市政は市民の自由に委ねられた。

中世北ヨーロッパの都市連合であるハンザが成立してからは（1241 年にリューベックとハンブルクとの間で結ばれた商業同盟＝陸路の安全に関する契約がその始まりとされる）、ハンブルクは北海におけるハンザ同盟のもっとも重要な港となった。

ここで後に「ハンザの女王」と呼ばれる都市リューベックについて触れておこう。北海からバルト海へぬける水路は、スカンディナヴィア半島南部とデンマークの間で狭い海峡となっており、暗礁が多い。そのため、輸送量の点では劣るが、より安全なユトランド半島南部を横断する陸路が併用された。その要衝としてバルト海に面したシュライ湾沿岸のヘーゼビュー（後のシュレスヴィヒ近郊）が重要だった[3]。この事情はリューベックについてもあてはまる。もとはスラヴ人居住地だった地域が征服されてザクセン公の支配下に入った、その地域に 1143 年、ホルシュタイン伯アードルフ 2 世によって商業拠点として建設されたのがリューベックである。リューベックは 1159 年にその上位君主であるザクセン公に譲渡され、ザクセン公ハインリヒ(Heinrich der

Löwe, 1129/1130 or 1133/35 - 1195)から都市特権を与えられた。この特権は、皇帝バルバロッサの 1188 年の特権状により追認された。さらに 1226 年には皇帝フリードリヒ 2 世（Friedrich II., 1194–1250）から帝国直属の特権状を交付されて「帝国都市」となった。商品輸送が急増したため、14 世紀末には、リューベックとエルベ川沿いのラウエンブルクとを結ぶシュテクニッツ運河（Stecknitzkanal）が開鑿された。これを通じて内陸のリューネブルクの岩塩の輸送や北海との舟運はますます盛んになった。

ラウエンブルクよりも下流に位置するハンブルクは、14 世紀にはハンザ同盟の重要なメンバーとなり、穀物、布地、毛皮、ニシン、香料、木材、金属の積み替え地として繁栄した。とくに地場産品であり重要な輸出商品でもあるビールの輸出によって、ハンブルクは「ハンザの醸造所」の異名を手にした(4)。ハンザは、北海・バルト海で船荷をねらう海賊の討伐にも力を注ぎ、1401 年、当時もっとも悪名高かった首領クラウス・シュテルテベーカー（Klaus Störtebeker）がハンブルクで処刑された。

ハンザによる北方貿易の隆昌は、バルト海と北海とを結ぶ通路（とくに海路）の支配をめざしていたデンマークとの対立を激化させた。スカンディナヴィア半島南部のデンマーク領スコーネ地方はニシンの好漁場であり、その入漁税と獲れた魚の取引市に対する税はデンマーク王の重要な財源であった。リューベック商人はリューネブルクの岩塩を供給し、塩漬けニシンとして加工してアルプス以北の全欧に輸出していた(5)。これを主要輸出品とするデンマーク（1397 年のカルマル連合の後の北欧三国）王はしばしば諸課税を強化しようと試み、1429 年には海峡通行税を新設したことによって、ハンザと対立した。ハンザは 1370 年、1435 年の 2 度にわたってデンマークを破り、自らの商業特権と免税特権を認めさせた。

14 世紀後半から、リューベックは内陸通商路を確保するために、ザクセン＝ラウエンブルク公エーリヒ 3 世に対してその所領を担保に多額の資金を融資した(6)。ところが 1401 年、借金を返済しないうちに公が死去し、いとこのエーリヒ 4 世が担保としていたエルベ川沿いの町ベルゲドルフを占拠し、ハンブルクとの間のエルベ川の船舶航行を妨害した。これに対しハンブルクとリューベックは共同して 1420 年、エルベ川の安全な舟航を確保するために、ベルゲドルフとその周辺地域を占領した。両ハンザ都市は後を継いだザクセン＝ラウエンブルク公エーリヒ 5 世との間で契約を取り交わし、これらの地域の共同統治権を手に入れた（両市による共同統治は 1868 年まで続く。この年にハンブルクがこの地域をリューベックから購入し単独統治下においた）。この頃のエルベ川は現在よりも上流側で分かれ、その分流はベルゲドルフの近くを流れていた。ハンブルクはその支配権獲得とともに、中州の土地を守るために堤防を築いて、分流を堰き止めた。それは中州の島々を結びつけるとともに、それによってハンブルク港に注ぐ北エルベ川の水量を増やし、船舶の航行を容易にするためであった。

2.3 経済発展と城塞環濠都市の拡大

15 世紀のデンマークの台頭は、ハンブルクにとっても潜在的な脅威となった。デンマークはそ

図 2　16 世紀のハンブルク　　(Melchior Lorich's　Elbkarte von 1567 – Kopie 1845　部分)

右から左へ流れているのがエルベ川であり、中央の中州をはさんで北エルベと南エルベに分かれる。画面上部からアルスター川(湖)が市内を通ってエルベ川に合流しているが、アルスター川からはまた、ハンブルクを囲むように水壕が設けられている。なお北エルベの集落にはアルトナ(Altenawe)、南エルベの集落にはハールブルク(Harburg)と記されている。

の封土スレースヴィ（シュレースヴィヒ）公領をめぐって、ホルシュタイン伯との戦争状態に入った（1416－23 年、26－32 年)。シャウエンブルク家のホルシュタイン伯・スレースヴィ公であったハインリヒ 4 世（Heinrich IV., 1397－1427）の死後は、弟のアードルフ 8 世(Adolf VIII, 1401?－1459)が戦いを続け、ついにスレースヴィ（シュレースヴィヒ）公領を確保した。

しかしホルシュタイン伯アードルフ 8 世が死んだとき、男系継承者がいなかったため、シャウエンブルク家は断絶した。その結果、母方の甥のデンマーク王クリスチャン 1 世（Christian I, 1426－1481, デンマーク王 1448－1481, ノルウェー王 1450 年－1481, スウェーデン王 1457－1464 年）がスレースヴィ（シュレースヴィヒ）公領を継承した。これに対して神聖ローマ帝国の封土であるホルシュタイン伯領の場合には、皇帝の許しがなければ女系継承者は認められない。だがホルシュタインとスレースヴィ（シュレースヴィヒ）の騎士たちは、同君連合の継続のほうが新たな紛争とそれに伴う負担を避けられると期待した。クリスチャン 1 世は 1460 年にリーベ（Ribe）に諸身分の代表者を招集して、スレースヴィ（シュレースヴィヒ）とホルシュタインとが「永遠に分かたれず」ともにあるべしと契約し、ホルシュタイン伯位を継承した。ホルシュタイン伯領は神聖ローマ帝国の封土のままであったが、神聖ローマ皇帝は 1474 年、クリスチャン 1 世を伯からホルシュタイン公に昇格させ、司法特権を持つ領邦君主とした。こうしてクリスチャン 1 世は正式に皇帝直属の封臣になった。

これは、デンマーク王やその継承者がハンブルクとその周囲の地域の君主となったことを意味する。クリスチャン 1 世は、度重なる戦争のための費用を調達するために、ハンブルクやハンザからの経済支援を必要としていたから、ハンブルクとハンザの諸権利に無用な干渉はしなかった。しかしまちがいなく、これまで獲得してきた諸特権を、隣接する領邦君主の圧力からくり返し守っていかなければならない時代が始まった。

ハンブルクは 1510 年、アウクスブルク帝国議会によって「自由ハンザ都市 Freie Hansestadt」として承認された。

16 世紀は、マルティン・ルターによって宗教改革運動が開始された時期でもある。ハンブルクがルター派になったのは 1529 年である。

デンマークでは、ルター派のスレースヴィ（シュレースヴィヒ）公クリスチャン（Christian III,, 1503－1559）が、デンマーク王位をめぐってオルデンブルク伯と争い、伯を支援したリューベック軍を破って王位に就いた。これは 1536 年の身分制議会において正式に承認された。これによってデンマークにおけるルター派の国教化が進むとともに、ハンザによるバルト海支

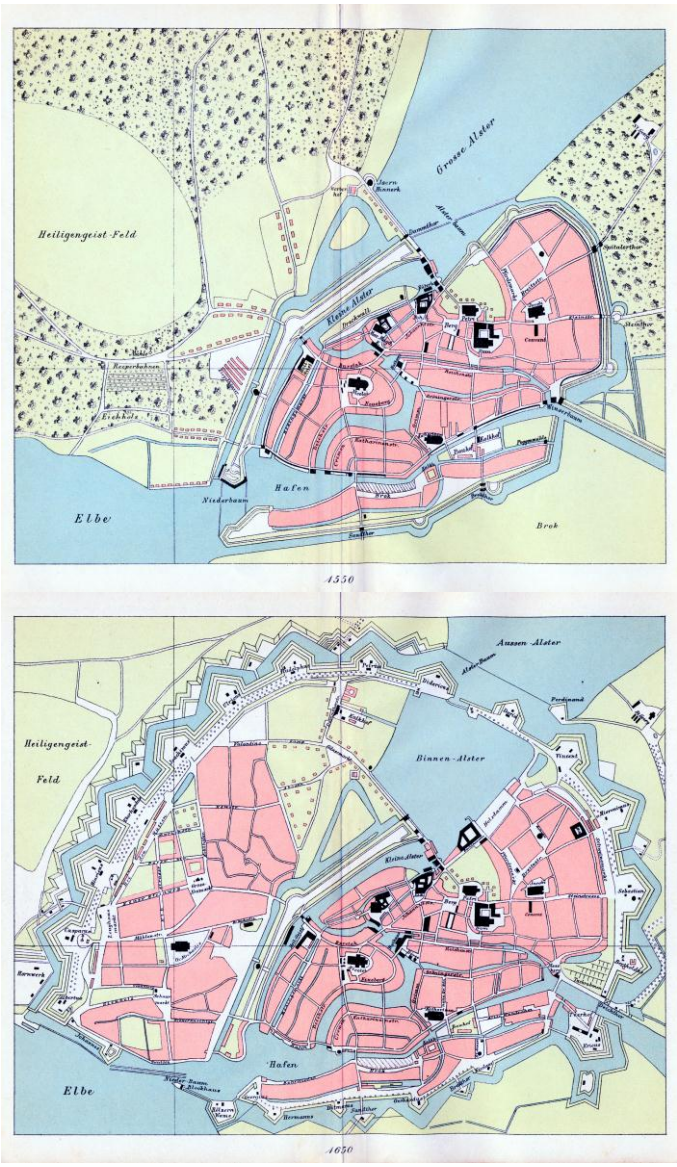

図 3　ハンブルク市域の拡大 1550 年-1650 年

（E. H. Wichmann, Atlas zur Geschichte Hamburgs. 1896.）

上が 1550 年の、下が 1650 年の地図。1650 年には市域は西方に拡張されて、全体が強固な城壁で囲まれ、新たに水壕が設けられている。これによってアルスター湖が内アルスターと外アルスターとに分けられた。拡張された新しい新市街の中心に位置するのは聖ミヒャエーリス教会である。城壁には、五角形や三角形の形で張り出したいくつもの稜堡が設けられており、それぞれに数門の大砲が配備されていた。

配の終焉が決定的になった。（最後のハンザ総会は 1669 年にリューベックで開催された。）

だがハンブルクはハンザの衰退期に、逆に経済的に発展してゆく。1558 年には帝国初の株式取引所が開設された。アメリカ大陸の「発見」およびアジア航路の発見もあって、ハンブルクは 1550 年以後、ヨーロッパのもっとも重要な貿易港の一つとなった。

スペイン領ネーデルラントで反宗教改革が進む中、過酷な迫害を逃れて 1567 年、ハンブルクとその隣のアルトナ（Altona）（1535 年頃ピネベルク（Pinneberg）伯領にできた漁師町）に最初の移民が到着した。1600 年頃になると、イベリア半島のユダヤ人がネーデルラントを経てハンブルクへ移住してきた。彼らは金銭を支払って、代わりに市民権を手に入れた。ハンブルクは外部からの移民を受け入れることによって、都市人口を拡大させるとともに、彼らの知識や力をもとに大西洋沿岸のヨーロッパ各地との貿易を拡大していった(7)。

このような貿易によって貯えられた富を基礎として、16 世紀の終わりには、市街の全体がいくつかの円形高楼（Rondell）を備えた城壁に囲まれた城塞環濠都市になった。その背景には、隣のアルトナとの間に生まれた緊張関係がある。ハンブルクとアルトナとは放牧権、貨幣鋳造権、エルベ川の使用などをめぐって対立しており、1591 年には境界紛争も生じた。アルトナはピネベルク伯から多くの特権を認められ、ハンブルクよりも早く 1601 年には、南ネーデルラントから避難してきたカルヴァン派や再洗礼派の人々にも宗教活動の特権を保障した（1555 年のアウクスブルクの宗教和議では、領邦諸侯に対してのみ、そしてルター派の信仰だけが容認されていたにすぎない）。1611 年には営業の自由を認めた地区が設けられ、手工業者たちはここで、ツンフト（同職ギルド）に加わらずに、これに束縛されることなく、自由に開業することができた。このような政策のおかげで、アルトナの人口は急速に増加した。

この時期に、デンマークがまたも勢力を拡張しようとする。デンマーク王クリスチャン 4 世（Christian IV, 1577－1648, 在位 1588－1648、スレースヴィ（シュレースヴィヒ）=ホルシュタイン公）は陸軍を強化する一方、国内産業の保護や自国商人の育成をはかるなど重商主義政策を推進していた。そして 1617 年には、エルベ川の舟航を管理できるように、ハンブルクよりも北海寄りの下流部に、軍港都市グリュックシュタット（Glückstadt, 「幸運の都市」）を建設させた。ここでも信教の自由が保障されたため、やがて迫害を逃れてきたユダヤ人や三十年戦争（1618－1648）を避けてきた新教徒が多数移住することになる。

エルベ川の舟航に介入しようというデンマークの動きは、エルベ川を対外貿易の動脈としているハンブルクにとって深刻な脅威となった。これに対抗するために堅固な防衛施設が必要と考えたハンブルク住民は、ネーデルラントの要塞建築家に依頼して新たな防御壁の建設を開始した。

城壁の建設は、1616 年から 1625 年まで続き、市民には建設作業への参加が義務づけられた。新しい城壁は町の成長を見越して、当時のハンブルク（現在のハンブルク旧市街）に加えて、対岸の同じくらいの広さの土地を囲んでいた（ここに生まれたのが現在のハンブルク＝ノイシュタット（Hamburg -Neustadt, 新市街）地区である）。城壁と稜堡は梯子で乗り越えられないよう芝で覆われ、尖った逆茂木を打ち込まれた。防御壁には 22 の稜堡が設置され、配備された大砲

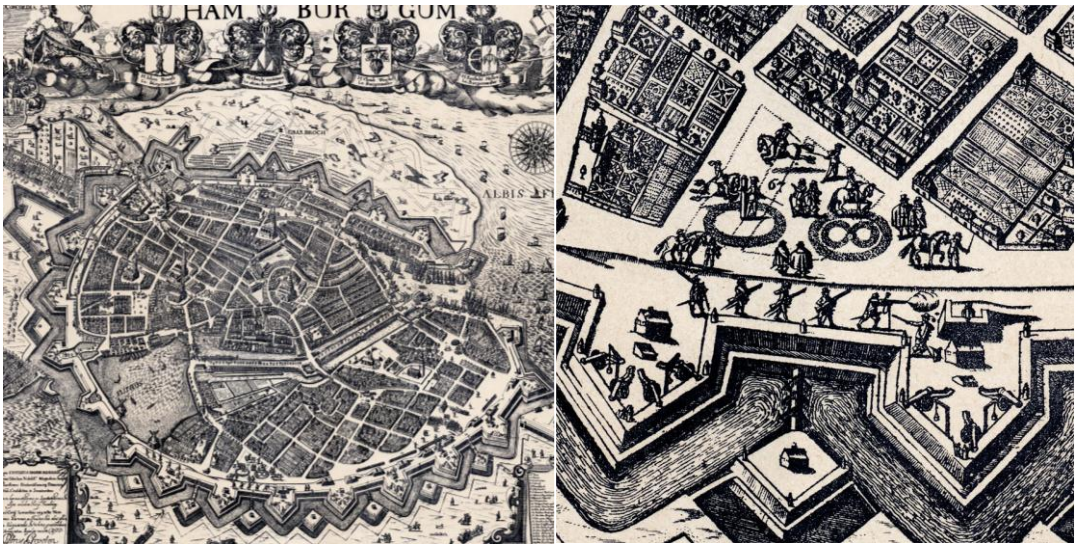

図４　17 世紀のハンブルク　（Hamburgum von Petrus Grooten, 1690.　photo-litho-graphisches Re-pli-kat vom Verlag Strumper & Co., 1879. 部分。右は一部を拡大したもの）

17 世紀末のハンブルクを描いた石版画で、左下に内アルスター湖、右上にエルベ川という配置になっている（図 3 の下図を上下逆にしたもの）。水壕に突き出した稜堡には数門の大砲が据えられており、市民が武器を手にして、戦闘訓練をしているようすが描写されている。

は 300 門に上るという。

防御壁の建設にともない、市街を取り巻く防御壁の環ができるだけ閉じたものになるように、水車用貯水池であったアルスター湖を分ける城壁が築かれた。その結果、貯水池は「内アルスター湖（Binnenalster）」と「外アルスター湖（Außenalster）」とに分かれた。アルスターの水流は、木橋によって保持されたが、遮断柵として鎖につながれた木の幹が浮かべられていた。

ハンブルクはかねてより帝国自由都市としての地位の確認を求めて、帝国最高裁判所（帝室裁判所 Reichskammergericht）に訴えていたが、1618 年に判決が下った。帝国最高裁判所はハンブルクの「帝国自由都市」(Freie Reichsstadt)としての地位を確認した。ただそれまでハンブルクをホルシュタイン公領の一部と見なしていたデンマーク王は、当然これを承認しなかった。

神聖ローマ帝国内のほとんどの諸都市は三十年戦争、すなわち神聖ローマ帝国内のカトリックとプロテスタント諸派との宗教的対立から始まり、皇帝と領邦君主との権力抗争、帝国領を舞台にしてスウェーデン、フランス、スペインが介入して国土を荒廃させた武力対立によって、略奪と破壊にさらされ経済的には壊滅してしまった。隣のアルトナも戦争中、デンマーク兵による略奪の被害をこうむり、1628 年の夏にはペストにより多数の死者を出した。さらに 1644 年には一時スウェーデンに占領された。

これに対してハンブルクは新しい強固な防御壁のおかげで、戦争の被害を受けなかった。むしろスペインとポルトガルの植民地諸国との交易から多大な収益を挙げ、人口も 40,000 人に達した。他方、戦中戦後にデンマークやスウェーデンによる攻撃に際し、こうして獲得した富をハン

ブルクは、その自由を確保するための支払いに充てなければならなかった（1632、1679年にスウェーデンに、1694年にデンマークに）。それにもかかわらず、これらの国々からハンブルクの帝国自由都市としての地位が承認されることはなかった。

この間にピネベルク伯家が断絶し（1640）、アルトナを含むその領地は1647年、ホルシュタイン公領に編入された。つまりデンマーク王の統治下に入った（アルトナは以後1864年までデンマークの統治を受け、法律や通貨もデンマークに同化された）。しかしデンマーク王は1664年、ハンブルクに対抗させるためにアルトナを市に昇格させ、これに都市特権を付与した。関税と倉庫税の免除、営業の自由、司法権が認められ、アルトナは領邦都市ではあるが、事実上の自由都市となった。以後、宗教的迫害を受けたユダヤ人やツンフト（同職ギルド）に入っていない手工業者らが移住した結果、アルトナは18世紀初頭には人口12,000を数えた。だが北方戦争（1700－21）の最中の1713年、市はスウェーデン軍によって焼き払われて壊滅状態となった。その後、港の復興、魚市場、市庁舎の再建が開始され、1720年には焼失以前の人口を回復した。北欧初の自由港が生まれ、アルトナはやがてコペンハーゲンに次ぐデンマーク第二の大都市に成長した。

少し時代を下りすぎたが、アルトナにおけるこのようなデンマークの統治は、ハンブルクの市政にも大きな刺激を与えた。ハンブルクからアルトナの自由区域へ営業の自由を求めて手工業者などが流出するという事態が生じたために、慎重にではあるが、アルトナと同じように「開かれた政治」が必要になった。

一般に中世都市においては、少数の有力市民からなる参事会が市政を担当していたが、ハンザ都市ではすでに14世紀末から15世紀にかけて政治参加を求める手工業者ら一般市民の暴動が頻発していた。15世紀初頭に、ハンザの盟主であるリューベックにおいても増税反対と営業の自由を求める争乱が起こった[8]。ハンブルクの参事会は1410年に、同様の争乱を未然に防ぐために、市政に関わる市民の権利を確認する和解書（Rezess)を交付した（ただ権利が認められたのは、有償の義務と納税義務を履行する市民つまり一定の土地・財産を所有する者に限られた）。参事会は、市民の同意なしに、市民を逮捕したり新たな税を課したり戦争を始めたりすることが禁じられた。しかしその後の参事会の態度は、市民の権利を縮小しようとしては、市民の抵抗に遭って譲歩するというくり返しであった。参事会と市民との対立は17世紀後半には、市長の逮捕・逃亡、市民の代表者による市政担当という事態になった。この対立は、リューネブルク＝ツェレ侯やデンマークからの圧力干渉を許しかねない政治的危機にまで発展した。15年間の危機を経て、参事会はようやく市民の力に頼るようになった。1712年の「主要和解書」(Hauptrezess)によって、参事会と土地所有市民とによる共同統治の原則が確定された。これはハンブルク市憲法の前身である。しかし選挙による代表が市政に関与するようになるのはずっと遅れて、ようやく1859年であった[9]。

ハンブルクの周辺地域に目を向けるならば、南エルベ川岸のハールブルク（Harburg）は、1641年よりリューネブルク＝ツェレ侯領となった。三十年戦争末の不穏な時期であり、隣のブレーメン＝フェーアデンにはスウェーデン軍が、ホルシュタインにはデンマーク軍が存在していたため、

ツェレ侯はハールブルクの居城を、ハンブルクの防御壁と同様の城壁で囲み、防御を固めようとした。居城は 1660 年までに、5 つの堡塁をもつ星形の城壁に囲まれた。周りの水壕の外側にさらに城壁を設けるという入念な防御が施された城塞であった(10)。ハールブルクは 1705 年にはブラウンシュヴァイク＝リューネブルク選帝侯（ハノーファー選帝侯）領の一部となった。

北エルベ北岸ハンブルクと南エルベ南岸ハールブルクとの間には、中州の島々が存在した。これらは 14 世紀から少しずつ堤防で囲まれ、干拓されていき、島々の間も堤防で閉じられていった。領主は変遷したものの、1672 年にはブラウンシュヴァイク＝リューネブルク侯ゲオルク・ヴィルヘルム（Georg Wilhelm, 1624－1705）の所領となった。それまでに堤防で結ばれて一つの島になっていたこの土地は、以後ヴィルヘルムスブルク(Wilhelmsburg)と呼ばれ、ブラウンシュヴァイク＝リューネブルク侯領の一行政区域となった。そして 1859 年にハールブルク市区に編入された。

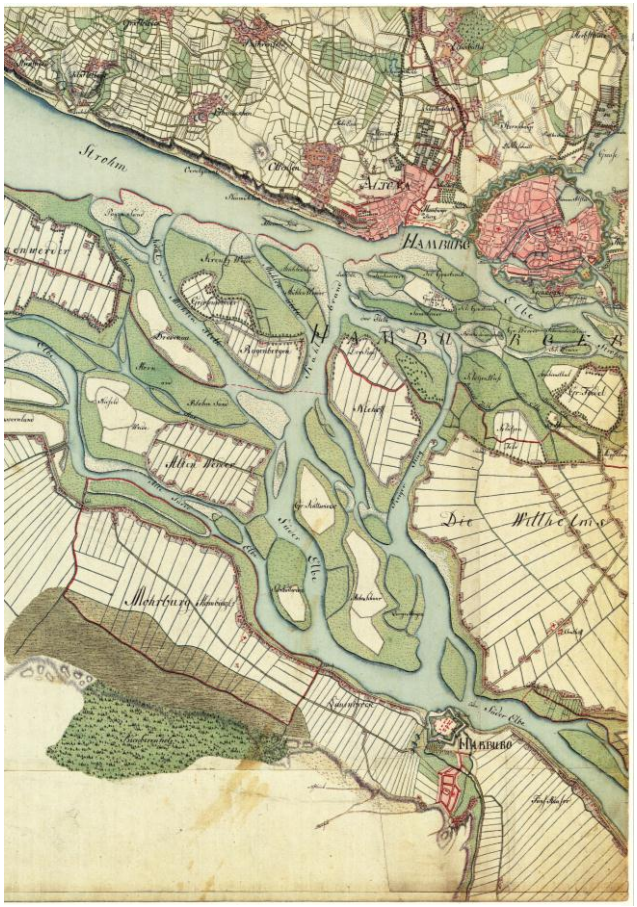

図 5　18 世紀のハンブルク市とその周辺地域の地図
（G. A. V. Varendorf, Altona, Hamburg, Harburg. Aufgenommen in den Jahren 1789 bis 1796.. 部分）
右上の北エルベに接した円形の都市がハンブルク。その左側にアルトナ市がある。農地化された中州の島々をはさんで、右下の南エルベのほとりにある星形がハールブルクの城塞。その南に住民の居住区がある。

2.3　城壁の撤去、世界への門

ハンブルクそのものは城壁に守られて、17 世紀から 18 世紀にかけてヨーロッパでも有数の貿易都市に成長した。それとともに、城壁の西側には徐々に新しい居住者が住み着くようになった。参事会がたびたび居住禁止の命令を出したにもかかわらず、その流れを抑えることはできなかった。市内の人口も著しく増加したため、住居が不足し家賃も高騰したし、居住環境も悪化した。その結果 1798 年から、日没後の完全閉門を段階的に緩和する措置が導入された。夜間も一部の

門は、通行料金を支払えば開門され市内に入れるようになった。城壁で市を閉鎖して防衛するよりも、市外の居住地や近隣の都市との人や物資の交流の必要性のほうが高まったのである。

フランス革命とその後の対ナポレオン大同盟戦争（1792-1807）の時代に、ハンブルク参事会はその中立を証明するために、ハンブルクの防御壁の取り壊しを決めた（1804 年)。防御壁は実際、1806 年のフランス軍の侵入を防ぐことができなかった。同年神聖ローマ帝国が消滅した。1814 年にフランス軍は撤退するが、1800 年に 13 万人を数えた人口は 10 万人に減り、経済的にも壊滅的な打撃だった。ナポレオン戦争後の処理が議論された 1815 年のウィーン会議では、ハンブルクの主権が保証された。この年、ハンブルクはドイツ連邦に加入したが、(おそらくはその独立性を内外に示すために）1819 年末から自由ハンザ都市と自称するようになった。

ナポレオン戦争後に産業化と経済自由主義とによって新たに生まれた富の分け前にあずかるために、地方から人々が集まってきた。 市を守ってきた城壁は、一部が 1820 年から 1837 年にかけて緑地・公園に改造された。古い市門も撤去され、新しく造り直された。しかし時代遅れとなって久しい市門の閉門後通行料金制が廃止されるのは、なんと 1860 年末のことである。このときに新たに生まれた緑地は、後に鉄道関連施設や帝国郵便管理局などの公共施設が建設されたときに、少なからず失われることになるが、市街地西側の緑地だけは残った。水壕も、瓦礫の処分場とされて失われていった。

初の選挙で選ばれた代表も参加したハンブルク市議会で、1860 年、権力分立、代議制などを盛り込んだ最初の「憲法」が公布された。人口はすでに 30 万人にまで成長していた。

19 世紀にはヨーロッパ各地で立憲制への移行や経済的自由を求める声が高まった。デンマークでも 1848 年、フレゼリク 7 世（Frederik 7., 1808 – 1863）が即位して「憲法詔書」を公表した。しかし、スレースヴィ（シュレースヴィヒ）とホルシュタインでは両者に共通の独自憲法、スレースヴィのドイツ連邦への吸収などを要求する運動が生じた。臨時政府が樹立されると、これを鎮圧しようとするデンマーク軍と、臨時政府を支持するプロイセン軍との戦争が始まった。この時には臨時政府側の敗北により 1852 年に現状維持のまま終戦になった。しかし 1863 年に、デンマークが再びスレースヴィへの憲法適用（スレースヴィの併合）の意志を表明すると、プロイセンはその撤回を求め、翌年にはオーストリアと結んでデンマーク戦争を開始、スレースヴィ（シュレースヴィヒ)、ホルシュタインを占領した。1865 年、シュレースヴィヒはプロイセンの、ホルシュタインはオーストリアの統治下におかれた。さらに 1866 年の普墺戦争に勝利した結果、プロイセンはその領土をハノーファーとシュレースヴィヒ＝ホルシュタインにまで拡張した。こうしてハンブルクはその周囲を、プロイセンという強国に囲まれることになった。

プロイセン首相ビスマルク（Otto Eduard Leopold Fürst von Bismarck-Schönhausen, 1815－1898）は以後、プロイセン主導のドイツ統一を強力に進めていき、1871 年にドイツ帝国を成立させた。ハンブルクもプロイセンの動きに合わせて、1867 年に北ドイツ連邦憲法を承認してこれに加盟し（ただし、関税権、司法権、自由港区域は留保)、最終的にドイツ帝国の連邦州となった。他のハンザ都市のブレーメンとリューベックも歩調を合わせた。

海運と世界交易の増加とともに、19 世紀後半には、ハンブルクは世界への門となった。その港湾容量と倉庫容量が拡張され、港湾部は北エルベ川の対岸にまで広がった。1888 年に自由港が開設され、ハンブルクはコーヒー、カカオ、香料、じゅうたんなどの世界最大の貯蔵庫の一つとなった。1895 年には「北海・バルト海運河」（キール運河＝バルト海沿岸のキールからエルベ川河口のブルンスビュッテル Brunsbüttel までを結ぶ）が建設され、ハンブルクはバルト海と直接結ばれた港としてますます重要になった。

20 世紀の初頭には、ハンブルクは人口 100 万を数える大都市になった。1911 年に最初のエルベトンネルが開通し、翌年には地下鉄が操業を開始した。第 1 次世界大戦後の 1919 年、最初の平等、直接、秘密の普通選挙がおこなわれ、民主的に選ばれた最初の市議会（州議会）によって新しい「自由ハンザ都市ハンブルク憲法」が制定された（1921 年 1 月施行）。

この時期に工業化が進展する中、ハンブルクと近隣のプロイセンの港湾都市アルトナ、ハールブルク、ヴァンツベークとの間で競合軋轢が目立つようになった。1928 年、ハンブルクとプロイセンと間で港湾協定が交わされ、関係都市の協力により港湾での貨物処理は改善された。しかし 1933 年から政権を担当したナチスの方針は、国内の経済センターを地域ごとに集約するというものだった。

この方針のもと 1937 年 1 月に「大ハンブルク法」(Groß-Hamburg-Gesetz, 正式には「大ハンブルクと他の地域の処理に関する法律」Gesetz über Groß-Hamburg und andere Gebietsbereinigungen)が公布され、4 月 1 日に施行された。これにより、それまではエルベ河岸の独立した都市だったアルトナ（1933 年 6 月 13 日調査の人口 241,970）(11)、ハールブルク＝ヴィルヘルムスブルク（同 112,593）、ヴァンツベーク（同 46,255）が、1938 年 4 月 1 日までに拡大ハンブルク市の一部となり、すでにハンブルクの所有領だったベルゲドルフとともに、その独立を失った。代わりに、ハンブルクに所属していた

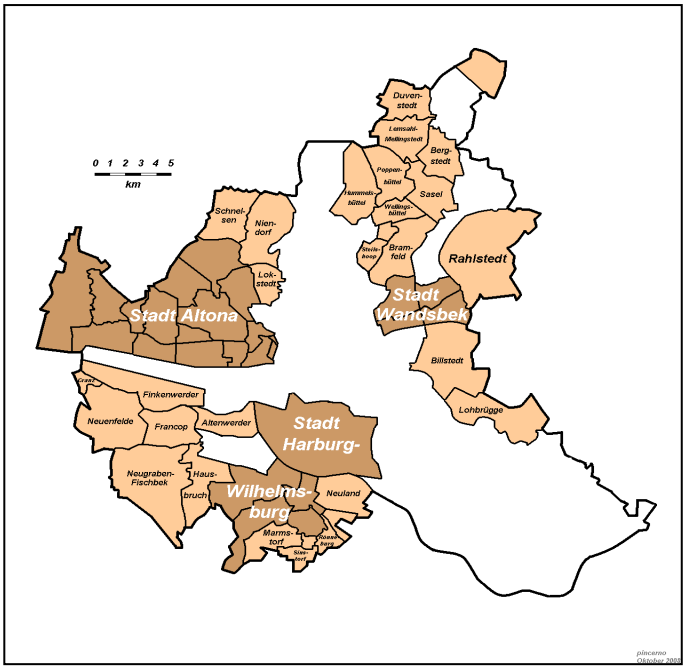

図 6　大ハンブルク法(1937 年)によるハンブルク市域の拡大

(Pincerno at de.wikipedia, Pincerno - Groß-Hamburg 2.png)

無色部分は、もともとのハンブルク市域で、色のついた部分が 1937 年に合併した地域である。濃い色は、それまで独立していた都市で、左上がアルトナ市、左下がハールブルク＝ヴィルヘルムスブルク市、右がヴァンツベーク市。薄い色はその周りにある町や村を表している。

いくつかの飛び領地が、プロイセンに割譲された。この結果、全体としてハンブルクの面積は 415 から 745 平方キロメートルに拡大し、人口は 119 万から 168 万に増加した。他方で、ハンブルク市憲法は無効にされ、そのハンザ都市としての自立性も国の利害に従属させられことになった。

この法律によって確定されたハンブルク市の境界が、現在まで通用している。なおこの法律によって都市州リューベックが解消され、プロイセンのシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州に編入された。

3. IBA ハンブルク

ハンブルク市(州)は、典型的な城塞都市として始まり、世界への門、広い世界に開かれた港湾都市としてドイツ第二の大都市にまで成長した。しかし、1937 年の大ハンブルク法で合併した新しい市域を有機的に旧ハンブルクと結びつけることにはなお課題を抱えていた。それらの地域には、市の経済的発展とともに外国からの移住者がますます増加し、居住条件や教育などの課題が生じている。そのような課題を解決するためにハンブルク市が採用したのが国際建築博覧会（IBA）および国際園芸博覧会（IGS）という手法である。IBA ハンブルク（2006－2013）は、「エルベを跳び越える」をスローガンとして、ハンブルクの北部と南部との共同成長を主題としている。ヴィルヘルムスブルクでは同時に、IBA と連繋して、ハンブルク国際園芸博覧会（IGS）2013 もおこなわれる。

3.1 国際建築展覧会 IBA

IBA（イバ）とは、国際建築展覧会（Internationale Bauausstellung, 英訳すると international building exhibition）の略称で、都市計画と都市開発の一手段としてドイツで創始された取り組みである。その目的は、都市建築や景観の改造が必要とみなされる地域を会場として、社会的・文化的および生態学的な新しい考案や企画を広く内外から募集し、コンテストという形でその改造プロジェクトに刺激を与えることにある。この取り組みの特徴は、都市計画担当者、建築家、景観計画者および企業が州境、国境を越えて参加することによってプロジェクトを促進させると同時に、その過程を公開しその成果を展示するというところにある(12)。

その始まりは古く、最初の国際建築展覧会は 1901 年にダルムシュタット（Darmstadt）で行われた。その特徴は、都市計画、建築、家具のデザインを含む包括的で全体的な企画だったという点にある。建築家、画家、彫刻家が協働して、環境に新しい形態を与えたという点で、それは芸術と日常、都市と自然とを宥和する試みと評価されている(13)。1913 年のライプツィヒ国際建築業展覧会（Internationale Baufach-Ausstellung 1913）は正確には「建築と居住のための国際特別展覧会」（Internationale Welt-Spezialausstellung für Bauen und Wohnen)といい、どちらかといえば大都市における社会状態・衛生状態を改善するための都市・住宅建設の技術的可能性

を展示することに主眼があった。これに対して、1927 年にシュトゥットガルトで開催された「住宅」展覧会を主催したのは、芸術と産業の統一をめざして 1907 年に結成されたドイツ工作連盟（Deutscher Werkbund）である[14]。しかし芸術、産業、手工業が協働することによって、「ソファークッションから都市計画まで」を包括的に形づくろうという要求を掲げた点で、IBA の系譜に数えられる。ル・コルビュジエ（Le Corbusier, 1887－1965）、ヴァルター・グロピウス（Walter Adolph Georg Gropius, 1883－1969）、ハンス・シャロウン（Bernhard Hans Henry Scharoun, 1893－1972）ら近代建築運動の担い手たちが参加して、集合住宅の新しい方向を示した（日本の同潤会アパート、公団住宅にも影響を与えたといわれる）。

表 1 国際建築博覧会（IBA）の歴史

開催年	開催地	重点テーマ・備考
1901	ダルムシュタット	「ドイツ芸術の記録」
1913	ライプツィヒ	「建築と居住のための国際特別展覧会」
1927	シュトゥットガルト＊	「住宅」（ヴァイセンホーフ・ズィードゥルング）
1952	ベルリン（東）＊	美しいコンパクトな都市
1957	ベルリン（西）	ハンザフィアテルの再建 （インターバウ）
1977－87	ベルリン（西）	「慎重な都市更新」、「批判的な再建」
1989－99	エムシャーパーク（ノルトライン=ヴェストファーレン州）	工業地帯のための未来
2000－10	フュルスト・ピュックラー・ラント（ニーダーラウズィッツ／ザクセン州）	「新たな景観のための工房」
2003－10	ザクセン=アンハルト州 19 市	「変貌する諸都市のための新しい視座」
2006－13	ハンブルク	「エルベを跳び越える」
2010－20	バーゼル（スイス・フランス・ドイツ）	（国境を越えて）
2020	ベルリン	（予定）
2012－22	ハイデルベルク（バーデン=ヴュルテンベルク州	「知が都市を創造する」（学問都市）
2011－20	パルクシュタッド（オランダ）	IBA オープン（予定）

＊は厳密には、IBA のプロジェクトではない。
出所:Wikipedia(de) „internationale Bauausstellung“により作成。

IBA の新しい方向と特徴を示したのは 1987 年の IBA ベルリンである。実施にあたってとくに留意されたのは歴史的な都市の復権、歴史的な中心市街地の再発見という点であって、現存する歴史的建造物を残しながら、新しい建物をはめ込んでいくという「都市の修復」という手法が採用された。これは IBA-Neubau（新築部門）のテーマ「批判的復元（kritische Rekonstruktion）」に明確に示されているように、第二次世界大戦以後の都市計画（住民を転居させ古い建物を壊して新しい建物を建設するという手法）に対する批判でもある。IBA-Altbau（改修部門）は「慎重な都市更新（behutsame Stadterneuerung）」をテーマとし、住民が居住しながら、都市の現在の社会的・機能的構造を保持し安定させながら開発を進めていくことに配慮した。

1999 年の IBA エムシャーパークの特徴は、IBA のこのような新しい方向性を地域開発に適用した、つまり住宅と都市を越えたところにまで展開したという点にある(15)。かつてルール工業地帯として繁栄した地域で実施された IBA エムシャーパークでは、自然景観を修復する取り組みがなされた。工業化の中で道路、鉄道や運河によって分断された緑（ビオトープ）や生態系をつなぎなおし、そこに遊歩道や自転車道も整備して「水と緑のネットワーク」を取り戻そうというものである。かつての産業施設群は産業遺産（文化財）および地域の景観として保存された。この IBA は、場所によっては有害物質で汚染されたかつての重工業地域が、自然環境に配慮しながら快適な居住・文化・余暇景観に生まれ変わった事例として世界的な注目を集めた。実施にあたって、ノルトライン=ヴェストファーレン州が 100%出資して 10 年限定の有限会社「IBA エムシャーパーク社」が設立されたが、IBA のさまざまなプロジェクトを実施する主体は、自治体や民間の会社・団体などである。IBA エムシャーパーク社の役割は、自治体などから申請されるプロジェクトが、IBA エムシャーパークのプロジェクトとして適切かどうか判断し、認めたものについては積極的に援助していくことであって、どこまでもコーディネーター役にとどまる。また、さまざまな催しがおこなわれ、住民の声を汲み上げようとした点が注目される(16)。

自然景観を修復し新しい文化景観を産み出すというエムシャーパークの取り組みは、IBA フュルスト・ピュックラー・ラント（Fürst-Pückler-Land, 2000-2010）のモデルとなった。150 年もの間、褐炭の露天掘りがおこなわれ、旧東独のエネルギーの中心でもあったニーダーラウズィッツでは、地域のプランナーや学生が「下からの IBA」を理念として、地域全体とその景観を視野に入れてさまざまなプロジェクトを提案した。それらをコーディネートしたのも同様に、期間限定の有限会社である。そして産業遺産、たとえば無用の長物と化していた東独時代の世界最大の採掘土運搬用可動橋 F60 が観光施設として再利用され、また人口減に対応した都市改造のプロジェクトが取り組まれた。それだけでなく採掘場跡からはヨーロッパ最大の湖景観が生まれた。30 ほどの新しい人造湖がつくられ、水面積は 14000 ヘクタールにも及ぶ。その半分は運河や全長 500km の自転車道によって結ばれており、水泳や水上スポーツなどを楽しむことができる。

図 6　採掘土運搬用可動橋 F60
出所：http://www.iba-see2010.de/de/projekte/projekt3.html

これに対して、同じ旧東独のザクセン・アンハルト州で実施された IBA 都市改造（都市再開発）(Stadtumbau,Urban Redevelopment) 2010 は、「未来は縮小する」(Weniger ist Zukunft, Less is Future)と題して、とくに旧東独地域で進行している人口減による「都市縮小」の問題に立ち向かう(17)。人口減に加えて高い失業率、住民の流出、それによる都市の衰退・財政難といった問題、さらに市街地に生じた空き地・空き家の問題に対してどう対処するか、州の 19 市が固有のテーマを掲げて IBA に参加した。実施にあたって設立された有限会社 SALEG（Sachsen

-Anhaltinische Landesentwicklungsgesellschaft GmbH）と州政府は、都市改造が住民や土地家屋の所有者、企業や自治体当局の利害に関わるために、再開発の過程におけるこれら当事者の間の意思疎通を基本原則の第一に挙げている。

3.2 IBA ハンブルク 2013

これまで見てきたように、近年の IBA は通例考えられるような建築物のたんなる展示会ではない。それは歴史的な都市の修復あるいは自然景観の修復と、新たな都市景観、文化景観の創造を謳い、そのためにできるだけ住民の声を汲み上げ市民参加を重視するという原則の下に、数年かけて自治体や企業、市民が参加して実施される作業のプロセスそのものとなっている。IBA ハンブルクも共通の原則に立っている。ただその照準はやはりハンブルクだけに、「大都市で開催される IBA」(Metropolen-IBA)というところに合わせられている。（英語版のウェブサイトでは「大都市の未来のための諸プロジェクト」がモットーだとされている[18]。）したがって IBA ハンブルクの力点は、とりわけ未来志向の都市開発の過程におかれているといってよいだろう。対象は、エルベ川の中州の島ヴィルヘルムスブルク地区とフェデル (Veddel)地区、それに南エルベの南岸ハールブルク地区の内港である。これらの地区は 1938 年に合併したものの、なおハンブルクと一体となっていないという（IBA ドックでのベッティーナさんの説明による）。

これらの地区を舞台に IBA ハンブルクは、3 つの主導テーマを掲げ、テーマに沿ったさまざまなプロジェクトを展開している。テーマは(1) 「コスモポリス」、(2)「メトロゾーン」、(3) 「気候変動の中の都市」の 3 つである。

第 1 のテーマ「コスモポリス」は、ますます国際化する都市社会がいかにしてその文化的多様性を力に変えてこれを発揮できるか、多国籍の人々がどうしたら暮らしやすくなるかという課題に応えようとするものである。ヴィルヘルムスブルク地区は市街地に近く、広さは 35 平方 km だが、そこに 100 以上の国の出身者約 55000 人が暮らしている[19]。始めはポーランドなど東欧からの移住者が、1970 年代以降はそれ以外の国々からの移住者が増えて、ハンブルクの中でも他国出身の住民の比率がとくに高い地区となっている（ハンブルク全体で 27%であるのに対し、この地区は 35%だという）。この地区で、どうしたら住民の多様な要求に応え、自己開発の多様な機会を住民に提供す

図 7 IBA DOCK（イバ・ドック）

訪問者に IBA ハンブルクの概要を説明するために、北エルベに設置されたインフォメーション・センター。側面には「エルベを跳び越える」というスローガンを象徴するロゴが描かれている。（2012.9.10 筆者撮影）

ることができるか、都市計画や建築、教育・文化、地域経済の促進を通じていかにして社会的・文化的バリアーを克服するか。この課題に応えて、この地区に 21 世紀の多様な都市文化が展開されうるような新しい都市空間を創り出そうというのが追求されている目標である。

その鍵を握るのは教育である。とりわけ言語（ドイツ語）と体操、就業教育・職業教育が重要であり、さらに自然科学や自然保護などの生涯教育も充実させなければならない。すでに「教育に挑戦するエルベの島」という枠組みの中で、地域主導のさまざまな提案がなされ、実践されている。IBA はこのような教育プロジェクトを都市開発と結合し、この地区に体を動かしながらドイツ語を学べる教育センターを設置する予定である。また世界地区(Weltquartier)と呼ばれる地区では外国人向けの福祉住宅（低層アパート）が改修されたが、その際に留学生を使って、「どんな住宅に住みたいか」住民に（その住民の言語で）インタビューしてもらい、ワークショップを開催して住民の理解を深めながら、事業が進められた。その結果、家賃は上がったが、断熱性能が高まり光熱費が 7 割減ったし、部屋が広くなったので、ほとんどの居住者が改修後、再び入居したという。今後さらに新しい住宅と広場も設けられる。

第 2 のテーマ「メトロゾーン」は、大都市の中でこれまでは通過し経由するだけだった地区に、どのような都市計画の可能性が潜んでいるかという課題を示している。北エルベと南エルベとにはさまれた中州の島は、南北にアウトバーン、鉄道路線、大型貨物トラックが通行する自動車道が走っており、そのため東西方向では 4 つに分断されている。住宅地の近隣にコンテナ倉庫や波止場のクレーン、産業遊休地、桟橋の船だまりがあり、鉄道と自動車道の間に湿原草地が広がっている。ハンブルク中央駅から電車で数分という恵まれた位置にありながら、いわば大都市の中の都市周縁部と化していたこの地区を、都市の中の緑豊かな水辺に、田園に改造し、新しい都市空間を創造することが目指されている。目標達成のために、自動車道を鉄道路線の隣に移設する開発が進められている。これにより自動車道によって分断されていた住宅地と未開発の湿地帯が結ばれ、広い居住と仕事とレクリエーションのための空間を実現できるようになるという。このヴィルヘルムスブルク地区の中心は、2013 年に同時開催される国際園芸博覧会の会場でもあり、これを通じて緑豊かな水辺空間を実現しようとしている（カヌー周回コース、水上バスなど）。また自動車道と鉄道路線の上には、いくつもの広い歩道橋がつくられ、この水辺と緑地の空間に容易にアクセスできるようにする計画である。

このテーマ、そしてその具体化としてヴィルヘルムスブルク地区中心に建築される建物群は、IBA における狭義の建築展示であり、その中核に位置づけられる。その中には、新しい建築素材を用いたスマートマテリアルハウス（微細藻類を飼育したガラスパネルを前面に設置して光と影を調節し熱を取り出す住宅、暑さ寒さを抑えて一定

図 8　建設中の都市開発環境省の新庁舎
（2012. 9.10 筆者撮影）

温度に保つ PCM 素材を用いた住宅など)、若い夫婦が購入しやすい価格に設定したスマートプライスハウス（間取りや内装を居住者が自作自弁する)、ハイブリッドハウス（壁を移動して住居にも事務所にも転用でき、家族構成の変化にも対応できるフレキシブルな住宅など）といったものがあり、魅力的な職住地区が形成されるだろう。また市(州)の都市開発環境省のひじょうにカラフルな庁舎も新築中である。

IBA ハンブルクではエルベ南岸のハールブルク地区の内港も再開発の対象になっている。ハールブルクのかつて城塞があった星形の島には、緑地公園が設置され、新しいウォータフロントの住宅地区と橋で結ばれる。

IBA の第 3 の主導テーマは「気候変動の中の都市」である。それは成長と持続可能性とを結びつけて、大都市はいかにしてそのエネルギー需要を満たしながら、しかも自然資源を守ることができるか、いかにして成長しながら、気候変動を抑えることができるかという課題に応えようとするものである。それは、大都市が一方ではひじょうに多くの二酸化炭素を放出しているという点で、地球温暖化の主原因とみられるからであり、他方で海岸に近い場合には、気候変動による海面上昇の危険にさらされているからである。

この点で IBA が提起しているのは、都市における省エネ（エネルギー使用効率の向上）とエネルギー自給の試みである。日本でも提案されている方針、たとえば新築・改築の際にエネルギー効率の高いものとする（パッシブ住宅、プラスエネルギー住宅)、既存の建物の改修によってエネルギー性能を高めるといったものもあるが、ゴミの山（廃棄物処分場）を「エネルギーの山」に変える、戦争中の遺跡を「エネルギー・トーチカ」にするといった斬新な計画も進行している。

ゲオルクスヴェルダー (Georgswerder)処分場（遮蔽シートを敷いた最終処分場、1979 年閉鎖）はダイオキシンなどの有害物質が発生していたため、今までは立ち入り禁止だったが、そこが再生可能エネルギーの山に変わった。高さ 40m ほどの丘の上には 2 基の風力発電施設を、また南斜面に太陽光発電施設を設置して、およそ 4000 世帯分の電力を供給している。地下から発生するメタンガスは回収され、製銅会社(Aurubis AG)で熱利用される。2013 年には周りに遊歩道が設置され、丘の頂上から港や市街地を眺められるようにすることになっている。

図 9　保存改修中のエネルギー・トーチカ
（2012. 9.10　筆者撮影）

ヴィルヘルムスブルク地区には、第 2 次世界大戦中の 1943 年につくられた防空壕と砲台を兼ねた巨大なコンクリート施設（トーチカ）が残っている。空襲の際には 3 万人が避難でき、屋上には 4 基の対空高射砲台が設置されていた。戦後 1947 年に、

英国軍によってその内部は爆破されたが、厚さ 3m の壁と厚さ 4m の天井部という外部構造だけが残ったというものである。60 年あまり放置された後、この防空壕が IBA の枠組みの中で、戦争記念碑として保存されると同時に、エネルギー・トーチカ（Energiebunker, energy bunker）として再生される。屋根部分には角形の太陽光発電装置が、南側壁面全面に太陽熱集熱器が設置される。発電すると同時に、Bunker（貯蔵庫という意味もある）の名の通り、内部に容量 8000m^3＝8000 キロリットルの貯湯槽が据えられており、需要のピーク時でも供給を維持できるようにする。これらの施設からは、地域の 3000 世帯分の熱と温水が、また 1000 世帯分の電気が供給される。屋上の砲台部分には、展示会スペースとオープンテラスが設けられ、高さ 30m の展望カフェも併設されるという。将来的には、バイオガス使用の熱電供給施設、木質チップを燃料とする地域暖房施設も設置する予定である。

3.3 国際園芸博覧会(IGA, IGS)、および批判

ハンブルク市州によるヴィルヘルムスブルクの自然景観の修復のための取り組みの特徴は、国際園芸博覧会の開催を目標達成の一つの手段としている点である。ハンブルク国際園芸博覧会(IGS 2013)は、2013 年 4 月から 10 月まで、エルベの中州地区ヴィルヘルムスブルクとフェデル（ゲオルクスヴェルダー）で開催される。

国際園芸博覧会は、庭園・公園の景観設計、植栽、庭園施設・備品をテーマとして開催され、国際園芸家協会（AIPH）に認定された国際的博覧会で、オランダで 10 年ごとに開催されるフロリアーデ(Floriade)が有名である。

ドイツでは 2 年ごとにドイツ園芸展覧会(Bundesgartenschau, BUGA)が開催されているが、10 年目の開催年にはそれに代わって、国際園芸博覧会(Internationale Gartenbauausstellung, 略称 IGA, Internationale Gartenschau, 略称 IGS）が開催される。開催には政府当局と主催都市、それにドイツ連邦園芸展覧会有限会社（DBG）が関わる。1993 年に創立されたこの会社のバックには、ドイツの造園業や園芸業の団体が控えている。国際園芸博覧会は、ドイツ連邦共和国からパリの博覧会国際事務局（BIE）に申請され、BIE と国際園芸家協会（AIPH）とによって認可されなければならない。

ドイツでの初開催は 1865 年であるから、ドイツの統一（1871 年のドイツ帝国の成立）より以前、日本では江戸時代にさかのぼる（明治維新は 1868 年）。1869 年と 1897 年にハンブルクで開催されたのを機に、市の防御壁や市門が次々に緑地公園施設に作り直された。市街地に近い植物園 Planten un Blomen は、1935 年の低地ドイツ園芸展の際に整備されたが、戦争中に荒廃したため、1953 年の国際園芸博覧会を機に再建された。1963 年には、植物園と防御壁や市門跡の緑地公園とが地下道などでつながれた[20]。西ドイツ時代のハンブルクでの開催は 3 度と多いが、国内の展覧会を含めても、今回の開催は 40 年ぶりということになる。

戦後のドイツ園芸展覧会は 1949 年にランダウ（ラインラント=プファルツ州）で南西ドイツ園芸展覧会が、1950 年にシュトゥットガルト（バーデン=ヴュルテンベルク州）でドイツ園芸展覧

会が開催された後、1951 年のハノーファー（ニーダーザクセン州）より現行の展覧会（BUGA）として隔年開催されることになった。またこれに付随して、州レベルの小規模の園芸展覧会（Landesgartenschau）も各地で開催されている。こちらは 1970 年にノルトライン=ヴェストファーレン州で初めて開催され、1980 年からはバーデン=ヴュルテンベルク州とバイエルン州でも盛んに開催されるようになった。

表 2 ドイツでの国際園芸博覧会の歴史

開催年	開催地
1865	エルフルト
1869	ハンブルク
1887	ドレスデン
1896	ドレスデン
1897	ハンブルク
1907	ドレスデン
1953	ハンブルク
1961	エルフルト(東独)
1963	ハンブルク
1973	ハンブルク
1983	ミュンヒェン
1993	シュトゥットガルト
2003	ロストック
2013	ハンブルク(IGS)
2017	ベルリン

出所 Wikipedia(de) „Internationale Gartenschau“により作成。

しかしそれに伴って、1980 年代から園芸展覧会・博覧会に対して批判が出されるようになった。批判の内容は次のようなものである。園芸展覧会は園芸業界と関連諸組織の品評会であるのに、税金で助成されている。主催地の自治体は、そこに観光客を集客し誘客する効果があると期待している。だがそのためにもともとあった自然の植生が破壊されることになる。通路や花壇や催事広場など（仮設のロープウェイが設置された例もある）を設けるために、自生している植物が雑草として除去されたり、木々の間の小道がつぶされ貴重な樹木が伐採されたりする。近隣の住民にとっては、開催前の整備期間と開催期間の間、それまで親しみ散策していた場所がフェンスで囲まれて入れなくなってしまう。会場には料金を払う人しか入場できないからだ(21)。今回の国際園芸博覧会に対しても批判が出ている。

ハンブルク国際園芸博覧会 2013 は、会期 4 月 26 日から 10 月 13 日までの予定で、100 ヘクタールの緑地を舞台におこなわれる。運営するのは、2007 年に設立された有限会社ハンブルク国際園芸博覧会 2013（Die internationale gartenschau hamburg 2013 gmbh）であり、ハンブルク市が 2/3、連邦園芸展覧会有限会社(DBG)が 1/3 の出資をしている。「世界周遊の 80 の庭へ」をキャッチフレーズにして訪問客を、世界各地の文化・風習、気候帯および植生帯を体験する時間旅行・世界旅行へ案内するという趣向である。期間中は会場でコンサートや文化行事がおこなわれ、スポーツを楽しみ、地元や世界の料理を味わうこともできる。大会のイメージパンフレットでは、171 日の開催期間中の入場者数 250 万人、経済効果は飲食宿泊の売上だけで少なくとも 8500 万ユーロが見込まれている。

しかし、そのために貴重な自然植生が破壊されることになる。保存か開発かをめぐる対立はハンブルクにもある。住民にとっても動植物にとっても休息所として重要な都市の自生的自然を保存することと、園芸博覧会のために関連地区を細部まで計画すること、両者の間の対立である。ウィキペディアの批判の紹介によれば(22)、ハンブルク自然保護連盟はヴィルヘルムスブルク地区の自生的自然、鉄道・港湾施設など隔離された場所に自生する自然を記録し、2006 年に現状調査報告を公表したが、この種の都市の自生的自然が IBA と IGS の開催のために破壊される。運河を作ることによって両棲類の生息地が奪われ、歩道、花壇、仮設ロープウェイをつくり催しやア

トラクションの余地を空けるために保存価値のある木も含めて伐採されるというのである。市当局はその補償措置として島の東部（Moorwerder 地区）で自然を復元再生する計画である。だがそこは以前もっぱら農地として利用されてきた地域であり、そこを湿原や草地に改造したり整備して植樹したりするという有様になっている。

地元紙には 2012 年 3 月、「犠牲の庭園」と題する痛烈な批判記事が掲載された(23)。これによれば IBA の建築プロジェクトのために 1,660 本、都市開発環境省庁舎新築のために 555 本（それに 26m 続く茂み）が除去された。また IGS 主会場のためには 2,228 本の樹木、4,197m ほど続く茂みが取り除かれ、防音壁の設置のために 2860m² の湿原が干拓される。さらに園芸博覧会の期間中しか必要でない駐車場 2500 台分を設置するために、税金を使って自然が破壊される。

市の環境省当局は、自然の復元再生のために新たに設けられる樹木や植物、ビオトープが「破壊されたのと等価値のビオトープ」になるまでには 25 年以上かかると算定している。しかし、園芸博覧会は現に存在するビオトープを活用して実施されるべきだという立場の批判者はいう。それは木が元通りに成長するのに 20 年から 30 年かかるといっているにすぎないと。人工的な自然はつくられるが、（会場となる）ヴィルヘルムスブルクの現存する湿原のビオトープと、（代替地とされる）モーアヴェルダーの現存する草地景観は犠牲にされる。

この批判は深い問いを含んでいる。自然を保護するといっても、その地域に自生する植生やビオトープをそのまま保全するのか、住民にとって有用な形に改変しても別の場所で復元すればよしとするのか、状況によって異なり、決まった答えを出せるものではないだろうし、答えを出せるだけの準備もない。ただ大東文化大学の東松山キャンパスで進んでいる再開発の場合にも、自生する木々が何本も伐採されているが、別の場所に復元再生するといった話は耳にしない。これを思うと、問題が提起され、それに答えるプラットフォームがあるという点で、ハンブルクのほうがすぐれている。つまりハンブルクはこれまでと同様に成長をめざしているが、その目標が同時に自然保護という共通了解の上に成立しているといえるのではないか。このような共通了解がなければ、日本でしばしば見られるように、利害関係者が議論しても自己利益のみが優先されて、建設的な方向に進まないという結果になるだけだろう。

4. おわりに

はじめに記したように、本稿はもともと研修授業をきっかけに執筆したものである。担当科目「地域研究」の教材として執筆し始めたが、ある程度まとまったので本誌に発表することにした。ハンブルクでの国際建築展覧会の最終公開年であり国際園芸博覧会が開催される 2013 年には、いくつかの報告や研究が出されるだろう。本稿は、その際の参考として役立つのではないかと期待している。現場に出る前に調べすぎたあげく、結局調べたことしか見てこないというのは問題であるが、事前にまったく調べずに、対象を見ているのにその意味が見えていないという結果に

なるのはもっと深刻な問題である。しかし、見たものの意味を後になってから、問い調べ考えるという型の学習は可能である。本稿がその一例である。

最後になってしまったが、ハンブルク市内を案内してそのまちづくり事情をわかりやすく説明してくださったズザンネ・エルファディングさんに心よりお礼申し上げる。

注

(1) ドイツ連邦統計局の数値。出所： http://www.citypopulation.de/Deutschland-Cities_d.html

(2) ハンブルクの歴史に関しては、おもにハンブルク市のウェブサイト(Hamburuger Geschichte: http://www.hamburg.de/geschichte/)、および Wikipedia (de)の“Geschichte Hamburgs”, “Hamburger Wallanlagen”の項目を参考にした。

(3) 百瀬宏・熊野聰・村井誠人編（1998）、『北欧史』 山川出版社、77 頁。

(4) ハンブルクのビール醸造業は、重要な輸出産業であった。生産量は 16 世紀に少し落ち込むが、品質の安定と向上に努めた結果、17 世紀には急成長する。斯波照雄（2010）『ハンザ都市とは何か』中央大学出版部、154－157 頁。

(5) スコーネ地方におけるニシン漁とその交易の最盛期は 14 世紀末であるが、15 世紀にもその重要性を失わない。谷澤毅（2011）、『北欧商業史の研究・世界経済の形成とハンザ商業』 知泉書館、262-269 頁。百瀬宏・熊野聰・村井誠人編（1998）、『北欧史』、85-86 頁。

(6) 斯波(2010)、前掲書(注 4)、61－65、78－81 頁参照。ただし 78 頁で「アルスター・トラーフェ運河」として言及されているものは、Wikipedia(de)の“Alster-Beste-Kanal”の説明にしたがえばアルスター=ベステ運河である。15 世紀半ばに、シュテクニッツ運河をモデルとして、アルスター川上流からベステ川に接続する運河が計画されたが、アルスター川上流部が運河に改造されたところで中断した。ベステ川はリューベックが位置するトゥラーヴェ川に注ぐ支流である。それゆえアルスター=ベステ運河が開鑿されるならば、これを経てトゥラーヴェ川に入ることにより、ハンブルクとリューベックとは船舶で直接結ばれることになる。リューベック、ハンブルクおよびデンマークが資金を拠出して 1529 年に運河は開鑿されたが、水量が不足していたため運行は間もなく制限され、1550 年に運用停止にいたった。

(7) 谷澤毅（2011）、前掲書、234 頁。

(8) 高橋理（1980）『ハンザ同盟／中世の都市と商人たち』 教育社、245 頁。

(9) 市参事会員はそれまで商人層だけで占められており、50 人から 60 人が互選で選ばれていた。1712 年から法学者が加わるが、参事会の正式な呼称は 1860 年まで「高貴かつ賢明な参事会」(hochedler und hochweiser Rath)であった。
cf. Von Rita Bake, Lars Hennings, Birgit Kiupel; Der Senat aus altem Geschlecht, Hamburgischen Bürgerschaft, Die Geschichte der Hamburgischen Bürgerschaft.

(10) エルファディング氏によれば、この城塞の跡は、現在はアパートになっているが、その輪郭を確認できるという。*cf.* http://www.elfferding.de/IBA/isan.html また本稿の 3.2 節でも言及する。

(11) Wikipedia(de) „Einwohnerentwicklung von Hamburg“ による。

(12) 日本では似たような取り組みとして 1922 年、大阪で住宅改造博覧会が開催された。設計コンペ入選作と建設会社の出品作の計 25 棟の住宅作品が総面積約 16.5 ヘクタールの会場に展示され、博覧会

終了後、一般に分譲された。ウィキペディアの項目「住宅改造博覧会」、大月敏雄 (2006)を参照。

(13) Museum für Architektur und Ingenieurkunst NRW のウェブサイトにおける評価。
http://www.mai-nrw.de/IBA-1901.60.0.html

(14) ドイツ工作連盟による最初の展示会は、1914 年にケルンで開催されたが、第一次世界大戦が勃発したために、会期途中で中止され、展示された建造物も撤去された。

(15) IBA エムシャーパークについては、以下の紹介がある。春日井道彦(2002) 『人と街を大切にする・ドイツのまちづくり』、学芸出版社、151－161 頁。永松 栄(2006) 『IBA エムシャーパークの地域再生―「成長しない時代」のサスティナブルなデザイン』、水曜社。澤田誠二（2001）「IBA エムシャーパーク・プロジェクトに学ぶ地域再生」、『RIM Report』vol.4.（建設コンサルタンツ協会）
http://www.jcca.or.jp/achievement/riim_report/vol_04/iba-1.pdf
http://www.jcca.or.jp/achievement/riim_report/vol_04/iba-2.pdf

(16) 澤田（2001）では、河川の水質浄化システムについて一般市民が議論に参加した事例が挙げられている。

(17) 都市縮小の問題点は、松田雅央氏の簡潔な整理にしたがえば、歴史的な街並み景観が破壊されること、団地の維持管理費用が余分にかかることにある。松田氏はいう。「建物を虫食い的に取り壊すと、これまで数百年をかけて積み上げてきた街の景観が簡単に崩れてしまう。歴史的な街並みは掛け替えのない財産であり、貴重な観光資源でもある」団地についても「空き家率の高い団地は、インフラと建物の維持管理に金の掛かるお荷物でしかない。空き家率が 50%を超えたとしてもエレベーターは動かさなければならないし、（中略）上下水道を止めるわけにもいかない。」建物の管理費用は建物の所有者（住宅供給公社や住宅組合）の財政を圧迫する。
http://bizmakoto.jp/makoto/articles/0807/01/news034.html

(18) IBA-Story＞IBA in 1:30/FAQ＞What's IBA doing in Hamburg?
http://www.iba-hamburg.de/en/nc/the-iba-story/iba-in-130faq/whats-iba-doing-in-hamburg.html

(19) 英語版ウェブサイトには誤って「40 カ国以上」となっているページがある。
IBA-Story＞IBA in 1:30/FAQ ＞Why pick the Elbe islands?
http://www.iba-hamburg.de/en/nc/the-iba-story/iba-in-130faq/why-pick-the-elbe-islands.html

(20) Igs 2013 イメージパンフレット„Das touristische Highlight 2013 “, S.7.
http://www.igs-hamburg.de/uploads/pics/Imagebroschuere.pdf
Planten un Blomen. Entstehung und Entwicklung, die Geschichte des Parks.
http://plantenunblomen.hamburg.de/parkanlagen-np/

(21) Wikipedia(de) „Bundesgartenschau“ による。これによれば、1980 年にすでにドイツ工作連盟が「育成によって破壊する」（Durch Pflege zerstört）というパンフレットを出して、博覧会によって歴史的な植生が著しく損なわれ醜くなったと告発したという。その中で社会学者・国民経済学者のルーツィウス・ブルクハルト（Lucius Burckhardt）が要求した園芸博覧会の見直しは、筆者には正鵠を穿ったものと思われる。園芸博覧会は第二次世界大戦後、たしかに諸都市が市内の公園を再生し修復することに貢献した。しかし現在ではもはや、公園に作り直せるような都市近郊の空き地は存在しない。その結果、かつては有用だった公園が、過剰な設備を施され、よりよく観賞できるだけの公園に変わってしまったというのである。

(22) Wikipedia(de) „Bundesgartenschau“ の中の igs Hamburug 2013 による。

(23) Florian Kleist, „Der Opfergarten“, Han-On Line (Harburger Anzeigen und Nachrichten),

2012.3.20.　http://www.han-online.de/Harburg-Stadt/article88840/Der-Opfergarten.html

参考資料

（文献）

1) 百瀬宏・熊野聰・村井誠人編（1998）『北欧史』 山川出版社.
2) 高橋理（1980）『ハンザ同盟／中世の都市と商人たち』 教育社.
3) 谷澤毅（2011）『北欧商業史の研究・世界経済の形成とハンザ商業』 知泉書館.
4) 斯波照雄（2010）『ハンザ都市とは何か』中央大学出版部.
5) 春日井道彦（2002）『人と街を大切にする・ドイツのまちづくり』、学芸出版社。
6) 永松 栄（2006）『IBA エムシャーパークの地域再生―「成長しない時代」のサスティナブルなデザイン』、水曜社
7) 日端康雄（2008）『都市計画の世界史』 講談社現代新書
8) W・キール他（2009）『ライネフェルデの奇跡　まちと団地はいかによみがえったか』澤田誠二・河村和久訳、水曜社
9) エルファディング、ズザンネ・浅野光行・卯月盛夫日(2012)『シェアする道路』 技法堂出版
10) IBA Hamburug の各種パンフレット（IBA _Hambrug のウェブサイト上からも入手できる）

（図版）

1) Die Elbkarte von Melchior Lorichs aus dem Jahr 1568 als Kopie von 1845 (Wikipedia Commons)
http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/ec/Elbkarte_Melchior_Lorichs_1567.jpg
2) E. H. Wichmann, Heimatskunde. 1863
3) E. H. Wichmann, Atlas zur Geschichte Hamburgs. 1896.
4) Hamburgum von Petrus Grooten, 1690. photo-litho-graphisches Re-pli-kat vom Verlag Strumper & Co., 1879.
（ 2, 3, 4 はいずれも Christian Terstegge 氏のウェブサイトより）
http://www.christian-terstegge.de/hamburg/karten_hamburg/index.html#a6
5) Gustav Adolf von Varendorf, Altona, Hamburg, Harburg. Aufgenommen in den Jahren 1789 bis 1796 unter der Direktion des Majors Gustav Adolf von Varendorf durch Offiziere des Schleswigschen Infanterieregiments.
http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Varendorf(62)Altona_Hamburg_Harburg.jpg
6) Pincerno at de.wikipedia (2010), Pincerno - Groß-Hamburg 2.png
http://de.wikipedia.org/w/index.php?title=Datei:Pincerno_-_Gro%C3%9F-Hamburg_2.png&filetimestamp=20110623175845
7) 採掘土運搬用可動橋 F60. http://www.iba-see2010.de/de/projekte/projekt3.html

（ウェブサイト）（網羅できないので、主なものやホームページのみ挙げる）
1) „Hamburuger Geschichte“ : http://www.hamburg.de/geschichte/
2) „Geschichte Hamburgs“ : http://de.wikipedia.org/wiki/Geschichte_Hamburgs
3) „Hamburger Wallanlagen“ : http://de.wikipedia.org/wiki/Hamburger_Wallanlagen
4) „Alster“ : http://de.wikipedia.org/wiki/Alster.
5) „Alster-Beste-Kanal“ : http://de.wikipedia.org/wiki/Alster-Beste-Kanal.
6) „ Einwohnerentwicklung von Hamburg “ http://de.wikipedia.org/wiki/Einwohnerentwicklung_von_Hamburg
7) Von Rita Bake, Lars Hennings, Birgit Kiupel; Der Senat aus altem Geschlecht http://www.hamburg.de/senat-geschichte/1943736/geschichte-senat.html
8) Hamburgischen Bürgerschaft, Die Geschichte der Hamburgischen Bürgerschaft. http://www.hamburgische-buergerschaft.de/cms_de.php?templ=aufg_sta.tpl&sub1=91&sub2=107&cont=8.
9) „Internationale Bauausstellung“ : http://de.wikipedia.org/wiki/Internationale_Bauausstellung
10) „Internationale Bauausstellung 1984“ : http://de.wikipedia.org/wiki/Internationale_Bauausstellung_1984
11) „Internationale Gartenschau“ : http://de.wikipedia.org/wiki/Internationale_Gartenschau
12) „ Bundesgartenschau“ : http://de.wikipedia.org/wiki/Bundesgartenschau
13) IBA Emscher Park : http://www.iba.nrw.de/main.htm
14) IBA Fürst-Pückler-Land : http://www.iba-see2010.de/
15) IBA Stadtumbau Sachsen-Anhalt 2010 : http://www.iba-stadtumbau.de/index.php?iba-stadtumbau-in-sachsen-anhalt-2010
16) IBA Hamburg : http://www.iba-hamburg.de/besucherinnen.html
17) (人口統計) http://www.citypopulation.de/Deutschland-Cities_d.html
18) Elfferding, Susanne (エルファディング，ズザンネ) 「国際建設博覧会(IBA)」 http://www.elfferding.de/IBA/IBA.html
19) Elfferding, Susanne (エルファディング，ズザンネ) 「IBA ハンブルク都市再生」 http://www.elfferding.de/IBA/isan.html
20) Elfferding, Susanne (エルファディング，ズザンネ) 「これぞ遺産？！？」 http://www.elfferding.de/IBA/isan.html
21) Museum für Architektur und Ingenieurkunst NRW : http://www.mai-nrw.de/IBA-1901.60.0.html
22) Hellweg, Vita Uli（ヘルヴェーク，ヴィタ=ウリ IBA Hamburg 社 CEO,「エネルギー効率の高い建物へ -国際ビルディング・エキシビジョンでの革新的アプローチ」 （「ハンブルク 再生可能エネルギー シンポジウム 2012 －風力発電と再生可能エネルギーの将来展望－」2012 年 5 月 31 日での講演のプレゼンテーション）： http://www.japan.ahk.de/fileadmin/ahk_japan/events_2012/4_Uli_Hellweg.pdf
23) 大場茂明ほか（2010）「『住みごたえのある町』をつくる－大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメント－」国際シンポジウム」報告内容

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/oba/project_pdf/SM2010_report01.pdf
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/oba/project_pdf/SM2010_report02.pdf
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/oba/project_pdf/SM2010_report03.pdf

24) 大場茂明ほか（2012）「住みごたえのある町」をつくる～ 映像で見るハンブルクのまちづくり～」
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/oba/project_pdf/forum2011_report.pdf

25) ウィキペディア「住宅改造博覧会」
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BD%8F%E5%AE%85%E6%94%B9%E9%80%A0%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A

26) 大月敏雄（2006）「まちなみ図譜・文献逍遙 5」、『家とまちなみ』54、61－65。
http://www.machinami.or.jp/contents/publication/pdf/machinami/machinami054_15.pdf

27) 澤田誠二（2001）「IBA エムシャーパーク・プロジェクトに学ぶ地域再生」、『RIM Report』vol.4.（建設コンサルタンツ協会）： http://www.jcca.or.jp/achievement/riim_report/vol_04/iba-1.pdf
http://www.jcca.or.jp/achievement/riim_report/vol_04/iba-2.pdf

28) 松田雅央(2008)「人口激減、そのとき都市は――旧東ドイツの事例に学ぶ「新しい街づくり」
http://bizmakoto.jp/makoto/articles/0807/01/news034.html

29) International Gartenschau Hamburg 2013.：http://www.igs-hamburg.de/igs-2013/

30) Igs 2013, „Das touristische Highlight 2013 “：
http://www.igs-hamburg.de/uploads/pics/Imagebroschuere.pdf

31) Planten un Blomen. Entstehung und Entwicklung, die Geschichte des Parks.
http://plantenunblomen.hamburg.de/parkanlagen-np/

32) Florian Kleist, „Der Opfergarten “, Han-On Line (Harburger Anzeigen und Nachrichten), 2012.3.20.：http://www.han-online.de/Harburg-Stadt/article88840/Der-Opfergarten.html